

V・ウルフ『灯台へ』における リリーの「中国人のような眼」について

—オリエンタリズム再考—

榎 原 理 枝 子

(1)

言説としてのオリエンタリズムとして、サイードが『オリエンタリズム』において見出したのは、東洋を異質な外的存在であるとして峻別し、後進性などの否定的なイメージを神話的言説へと西洋が固定化・制度化していったということと、そうすることによって、西洋が東洋にあてたのとは逆のイメージを西洋に見出し、自らのアイデンティティを形成したという硬直的な二項対立の構図であった。サイードが『オリエンタリズム』において中心的な問題意識としているのは、「アラビストとイスラム学者」の対中東関係であって、中国などの東アジアの問題を深く検討しているわけではない。だが、サイードによるオリエンタリズムの概念が問題視しているのは、「西洋」が、世界を「西洋」と「非西洋」に二分したうえで、「非西洋」に対し、その諸地域の特殊性を無視し、一律に「オリエント」というイメージを造りあげ、押し付けたということである。オリエンタリズムのこの問題点を視野に入れつつ、ウルフのテキストに見られるオリエント＝「非西洋」の表象を、本論の関心としては、『灯台へ』(1927)におけるフィギュレイション⁽¹⁾としての「中国」を、検討してみたい。この場合、「非西洋」に対する概念としての「西洋」とは、帝国主義的欲望をその特徴とするヨーロッパ強国であり、本論は、そのヨーロッパ強国のひとつとしての大英帝国を念頭に置いている。

まず、「西洋」から見たイメージとしての「中国」がいかなるものであ

たかを概観しておこう⁽²⁾。「西洋」にとって、中国とはキリスト教宣教師らによる改宗活動の場であって、植民地化の欲望の対象であった。こうした「中国」に対し侮蔑と憧憬の混在した視線を投げかけてきたという共通項によって、その内部に多少の個別性はあるにせよ、ひとつの文化圏としての「西洋」を想定することができよう。そして、このような「西洋」の視線は、イデオロギーとしての力を、「西洋」内部で生産されるテキストに、そしてそのひとつであるウルフのテキストに、不可避的に及ぼす。

イギリスのレイモンド・ドーソンの『ヨーロッパの中国文明観』は、西欧全体の中国観の歴史を扱っている。ドーソンのこの著作が適切な概略を描いているので、この骨子を示すことで、「西洋」の「中国」観の変遷を見ることにする。マルコ・ポーロたちが「中国」を富裕で豊穡な国として伝え広め、そして、16、7世紀のイエズス会士らは「中国」を好意的に評した。それに基づいて18世紀の啓蒙哲学者たちは「中国」を高く評価した。18世紀半ばにはシノワズリーの流行が最高潮になり、そしてフランス革命後あたりからは、歴史家は「中国」を停滞した専制国家として語り、それに続いて19世紀初頭から「中国」への視線は侮蔑へと転化するという。

19世紀初め、イギリスのプロテスタントの宣教師たちが布教に乗り出したが、当時の清は禁教令をしいていたため、かれらは東インド会社やアヘン商人を活用するしかなかった。こうした宣教師の典型的な例に、ジェームズ・レッグをあげることができる。レッグは、約30年間、宣教師として香港に滞在し、中国経書の翻訳に励んだ。1876年、彼はオックスフォード大学初の、そしてイギリスで最初の中国語教授となった。儒教と道教をキリスト教と比較した著作も、彼は残している⁽³⁾。レッグは、孔子の反動性が中国の停滞の原因であるとみなし、儒教に対するキリスト教の優越を主張している⁽⁴⁾。このような彼の見方は、当時のイギリスの「中国」観の傾向を映し出している。

ダーウィンの『種の起源』(1859)の後の、またスペンサーらの社会進化論以降のヨーロッパ知的世界を支配した進化への信仰と進化論的歴史観によって、19世紀後半以降、「中国」の「停滞」がいつそう否定的に捉えられるようになっていった。J.S.ミルは、『自由論』(1859)において、停滞した中国が改善されるのならば、それは外国の介入によるであろうという帝国主義的

な言説を弄している（137）。こうした見方が代表しているように、大国による帝国主義の時代になると、「西洋」は中国に対して侮蔑の視線を向けるようになる。

こうした植民地主義的「中国」観とウルフの問題に入る前に確認しておきたいのは、「西洋」の文化システムとしての「中国」観が、「西洋」で生産されるすべてのテキストにそのイデオロギー権力を及ぼすのが必然であるということである。なぜならば、特定の地域、時代、文化において支配的なイデオロギーや言説は、そこで生産されるあらゆるテキストに、テキスト生産の主体の個性が多少の拮抗を加えることはあるにせよ、文化的基層としての権力をおよぼすからである。個人としての作家が、いかなる影響を受け、どのような思想を抱くに至ったかということの問題とするのではなく、テキストの生産、すなわち世界の認識・表象において、そのテキストが生産される時代の文化的基層、すなわちフーコーのいう「エピステーメ」としての「西洋」の「中国」認識を問題とし、そのうえでウルフのテキストに向かいたいのである。こうした観点から、ウルフのテキストに見る「中国」の表象を調べていくことにする。

まず、『ダロウェイ夫人』（1925）に「中国」があらわれる箇所を見てみよう。物語上の「現在」の一日の始まりに、クラリッサ・ダロウェイは花を買いに出かけ、その帰り道、誰であるかは分からないが、要人が乗っているとおぼしき自動車がボンド・ストリートを立ち去るのを目にする。

車は立ち去ったが、あとに残されたわずかなさざ波は、ボンド・ストリートの両側に立ち並ぶ手袋店や洋服店をひたした。30秒間、誰もが一樣に車の窓に顔を向けた。手袋を選びながら、——肘までのにしようかしら、それとももっと長いのがいいかしら、レモン色、それとも薄いグレーの方がいいかしら——レディたちもその手を休めた。しかしその言葉を言い終わるか終わらないかのうちに、なにかが起きていた。それはひとつひとつは取るに足りないもので、たとえ遠い中国の地震を計測できる非常に精巧な機器でもその振動を記録できないのに、しかし全部を合わせると侮りがたい力を持ち始め、多くの人に訴えかける情緒的な力を発揮する。すべての帽子店と洋服店では、見知らぬ人たちが互いに顔を見

合わせ、戦没者や国旗や帝国のことを思う。ある裏通りのパブでは、植民地から来たひとりの男がウィンザー王家を侮辱し、そのために口論が起き、ビールのグラスが割られ、大騒ぎになったかと思うと、通りを隔てた店にも異様な反響を響かせ、結婚式のために純白のリボンが縫いつけられた白いインネルの肌着を買っていた若い娘たちの耳にも達する。通り過ぎていった一台の車がつくりだした表面上の動揺が、深みへと沈んでいくにつれ、とても深いところにある何かに触れたのだ。(下線筆者)
(14)

この箇所における「中国」とは、遙か彼方の地を示す指標として機能している。が、それだけではない。たとえ遠い中国の地震を計測できるような精巧な機器でも感知できないようなわずかな「なにか」が起きていて、その微細な「なにか」が力を十分に発揮すると、多くの人々に情動的な力を発揮し、「戦没者」、「国旗」、「帝国」を思わせるという、この連想のあり方に注目したいのだ。要人が乗っているらしい自動車が、そこに居合わせた人々に、ヴィクトリア朝以来多くのイギリス人が誇りに思っていた大英帝国の存在と、帝国の保持・拡張のための戦争を連想させているということである。ここで遠い異国の例として、他にもない「中国」を挙げることで、イギリスと清との間の片貿易(1699-1773)、インドを加えた三角貿易(1773-1842)、アヘン戦争(1840-1842)に象徴されるイギリスの中国への帝国主義的欲望をも示唆しているのである。すなわち、「中国」とは、イギリスにとって、自国の利益のために利用できる存在であったということが露呈しているのである。

ここで引用した場面に登場するような一般的なイギリス人にとって、「中国」はどのような存在であったのだろうか。さきほど言及したドーソンによると、一般大衆が普通教育でリアルな中国観を得るといことはほとんどなかったという(159-60)。ドーソンのこの見方に従えば、この場面に登場するような一般の人々にとって、「中国」とは実体のある国家というよりもむしろ帝国主義的な欲望の対象であったのだ。たとえ彼らがそれを明確に意識してなかったにしても。つまり、「西洋」から見た「非西洋」が、支配と所有の欲望の対象であったというオリエンタリズムの構図を、この場面にとめることができるのだ。そしてまた、「西洋」の文化システムとしての「中

国」観とオリエンタリズムが、ウルフのテキストに浸透していることの証左をもここにみることができる。

「西洋」の「中国」観が、イデオロギーの権力としてウルフのテキストにも及んでいることを指摘したところで、『灯台へ』における独身の無名画家、リリー・ブリスコーが「中国人」のような「つりあがった」眼をした女性であるとされていることの意味を考えてみたい。

この角度からの論考に入る前に、『灯台へ』がどのように読まれてきたかを概観しておく。『灯台へ』は作家の自伝的要素が濃厚であるとされ、その自伝性が注目されることが往々にしてあった。『灯台へ』を着想した頃の日記⁵⁾でウルフは彼女の両親と彼女自身の幼年時代を書きこうという意図を見せている。さらに、『灯台へ』を書き上げてから、ウルフは「母に憑かれることはなくなった。もはや母の声を聞くこともない。母を見ることもない。」(“A Sketch of the Past” 81) といっている。これらが、たとえば『灯台へ』をウルフによる彼女自身の家族の再構成であるとみて、彼女と父との関係が最終場面の灯台行きに投影されているとする論(Lilienfeld)や、あるいは、女性であるということと文学の様式、そして母と娘の関係に注目した読解(Lidoff)を誘ってきた。また、ウルフが「言葉は不純な媒体だ。絵画という無言の王国に生まれたほうがずっとよかった。」(“Walter Sickert” 176)と述べていることが、画家リリーを小説家ウルフの分身として捉える際の伝記的な意味での根拠を与えた。また、家族の問題に着目した論としては、フロイト的父親を起源とする発達心理学説でジェームズとキャムを説明し、それに対してリリーをメラニー・クライン的な母親起源からの挑戦の媒体として捉え、彼女の絵に注目した説(Abel)、ラムゼイ夫人を神話的母親像として捉え、リリーが見るラムゼイ夫人の幻覚と、『灯台へ』第二部の「時はゆく」の役割を考察した読解(Ferrer)がある。さらにはラムゼイ夫人を理想的女性というよりむしろカオスを調和に導こうとする芸術家として解釈する論(Bowlby)などがあるが、『灯台へ』におけるオリエンタリズムに着目した論はあまりない。そこで、メタファー⁶⁾としての「中国人」に着目し、「中国」というフィギュレイションがあらわれる必然性を問題にすることで、これまでの多くの『灯台へ』論が試みてきたような母の死の意味やリリーの絵を議論の中心に据えるのとは違う方向からの読解を試みたい。

(2)

母の死というモチーフに注目して、『灯台へ』をヴィクトリア朝小説の系譜に連なるものとして捉える読み(Dever)は妥当であるし、また、母が亡く、父への言及がほとんどないという意味で、リリーを実質的に孤児であるとして、『灯台へ』の孤児の探求の物語としての面に着目してヴィクトリア朝小説の枠組みを念頭に置いた見方(Lilienfeld 613)も可能だ。もっとも、リリーの父については別の解釈を試みたいが、ヴィクトリア朝小説的な探求の物語として『灯台へ』を読むことについては、妥当性を認めたい。だが、『灯台へ』第一部「窓」と、約10年後の第三部「灯台」のあいだに、1918年の第一次世界大戦終結があることから、スーザン・ディックは「窓」の設定されている年代を、ヴィクトリア朝ではなく、エドワード朝の終わり頃だと算出している(58)。しかし、ディックは、ウルフが『灯台へ』においては日時を特定する必要はないと考えていたことに言及し、さらに『灯台へ』において年代や登場人物の年齢等に関する具体的事実が特定されていないこと、また、登場人物の外見や過去が部分的にしかあきらかにされていないことに議論をすすめる、登場人物が個人であるとともに「象徴」であるという読解を打ち出している(62)。ならば、「窓」の時代設定がエドワード朝であるにしても、ラムゼイ夫人をヴィクトリア朝的なものの「象徴」として捉えたい。つまり、ラムゼイ夫人がヴィクトリア朝的な理想像としての「家庭の天使」の相貌を見せてテキストに存在しているということである。

では「家庭の天使」はいつ頃まで「理想像」の地位を保っていたのか。つまり、ラムゼイ夫人がヴィクトリア朝的なものの「象徴」であるにしても、エドワード朝の「窓」の時点で、彼女が体現しているヴィクトリア朝的理想は、まだ理想として有効であったのだろうかという点を整理しておきたい。

女性奉仕協会ロンドン支部で行った講演で、ウルフは「家庭の天使」のことを次のように説明している。

あなたがたは私より若く幸せな世代ですから、家庭の天使のことを聞いたことがないかも知れません——家庭の天使という言葉で、私が何を意

味しているのか、お分かりにならないかもしれません。できるだけ手短かに説明いたしましょう。家庭の天使はとても同情深いのです。とても魅力的です。自己中心的なところが少しもありません。家庭生活を営むうえで難しいわざに熟達しています。日々自己犠牲をいといません。 (“Professions for Women” 102)

この講演が行われたのが 1931 年、ウルフは彼女自身よりも若い世代の聴衆は「家庭の天使」を知らないかもしれないと言っているが、ウルフによると、「当時——ヴィクトリア朝の最後の頃ですが——どの家庭にも天使がいました。」 (“Professions for Women” 102) というのである。さらにウルフは、彼女が著作の仕事をはじめたとき、それは、「著名な男性作家の小説」の書評であったと彼女は語っているが、「家庭の天使」は、ウルフに、女性らしくその男性作家をほめあげるよう強要し、ウルフは「家庭の天使」を「殺さ」なくては、思うようにその書評を書くことができなかつたと告白している⁷⁾。ウルフの最初の出版された仕事は『ガーディアン』誌に載ったウィリアム・ディーン・ハウエルズの小説の書評であり、これが出たのが 1904 年のことだった。ウルフが「家庭の天使」を「殺害」したのは、この頃であろう。すなわち、ヴィクトリア朝とは、ウルフのテキストにおいて、実際のヴィクトリア女王の治世 (1837-1901) 以降も残存していたのであり、ウルフにとってのヴィクトリア朝は、ヴィクトリア朝的なものの延長の時代をも含めて考えなければならない。

ラムゼイ夫人が、すべての女性にとって結婚が至上の幸福であると考え、また、配偶者のいない者を男女を問わず憐憫の対象とし、周囲の男女を結婚させたがるということは、彼女の個人的な傾向であるだけでなく、ヴィクトリア朝的な家庭観をその背景としている。産業革命を経て、1850 年代に入ると、すなわちヴィクトリア朝中期ともなると、商業化と利潤追求が激化していく。こうして近代資本主義が確立していく過程で、職場の対極にあるオアシスとしての家庭の神格化が行われるようになった。また、中産階級の台頭が著しかったヴィクトリア朝は、妻子を扶養する夫と家庭を守る妻という家庭観⁸⁾が確立した時代でもある。こうして家庭生活というものが、新たな重要性を獲得し、ヴィクトリア女王とアルバート公の築いた円満な夫婦

関係と幸福な家庭は、当時のイギリス国民にとって規範的家庭像として機能した。ラムゼイ夫人の家庭観は、こうした時代背景のなかで理解されなければならない。

が、ラムゼイ夫人がリリーを結婚させたがるのは、家庭賞揚の時代傾向のためだけではない。ラムゼイ夫人にとって、リリーが結婚しないでいるということは、ヴィクトリア朝後半の社会問題である「余った女」問題のひとつのあらわれなのだ。イギリスでは19世紀後半以降、主として男女の死亡率の違い、海外移住に対する男女の意識の相違、中・上流階級の男性の晩婚傾向によって、適齢期の女性の数を適齢期の男性の数が圧倒的に上回ったことにより、結婚相手が見つからない女性が大量に出現した。家庭に入らない女性の増加は、家父長制に基づく当時のイギリス社会を根底から揺るがすことにもなりかねない。結婚相手のない女性たちは俗に「余った女」と呼ばれ、「余った女」問題はヴィクトリア朝後半の社会問題となった。ついには「余った女」を植民地に移住させ、家事労働者としての職を見つけさせるという方法で、この問題を解決しようという案(Greg)があらわれるにいたった。もっとも、刑罰を連想させるこの案が、多くの反撃的となったことは周知のとおりであるが、それだけ社会的影響は大きかったということでもある。このことから分かるように、「余った女」の存在は解決すべき問題なのであり、グレッグの案が象徴的に示しているように、「余った女」たちは国内に居場所がない社会的「他者」であった。「余った女」リリーの社会的「他者」としての側面に、「中国人」という人種の「他者」のメタファーが与えられていることを強調しておきたい。

(3)

ラムゼイ家の別荘に出入りしている若いポールとミンタを結婚させたことで、ラムゼイ夫人は、夫婦・家族という単位を新たに作り出し、家父長制存続に荷担しているということになる。こうした意味で、ラムゼイ夫人は家父長制と共謀関係にあるといえる。リリーに結婚を勧めるラムゼイ夫人の行動が示しているのは、ラムゼイ夫人がリリーを家父長制のシステムに組み込もうとしているということである。「結婚しない女性は人生の最上の部分を取

り逃がしている」のであり、「このことに絶対に反論の余地はない」(44)と、リリーに語るラムゼイ夫人に対し、リリーは次のように反駁する。

あら、でも私には父がおりますし、家庭があります。それにおこがましい言いながら絵も。しかし、これではラムゼイ夫人への反駁としては余りにささやかで少女じみているものでした。(44)

リリーが理由に挙げている「父」「家庭」「絵」については、後にまた述べるが、ここでは、結婚を勧めるラムゼイ夫人に対し、リリーが次のような態度で応えることだけを指摘したい。

……私は必死の勇気をふりしぼって、自分だけは普遍的な法則からの除外例であることを主張し、そのことを認めてもらいたいと嘆願するのでした。自分は独りでいるのが好きであるとか、自分自身でありたいとか、結婚生活に向かないとか……(45)

結婚しない女としてのあり方を許して欲しいとリリーは「必死の勇気をふりしぼって」「嘆願」するのである。このことは、女性が意図的に結婚しないという生き方を異常なものとして見るヴィクトリア朝的な見方が健在であったことを示す。リリーは「独りでいるのが好きだ」「自分自身でありたい」「結婚生活に向かない」という理由でラムゼイ夫人の、すなわち家父長制の「普遍的な法則」から逃れようとする。リリーは、ヴィクトリア朝の、またラムゼイ夫人の発想では、是認しがたいものである結婚しないという生き方を志向しているのである。つまり、リリーは彼女自身を結婚によらない生きる道を模索する「新しい女」^⑨と見て、家父長制への参入を拒否しているのだ。

「自分自身でありたい」ために結婚を拒否するということによって、リリーの「新しい女」としての側面があきらかになる。自己実現のために結婚を拒否する「新しい女」の先駆者を、ジョージ・ギッシングの『余計者の女たち』(1893)のヒロイン、ローダ・ナンに見出すことができる。ローダは「余った女」問題を、彼女たちが結婚によらずに生きていけるようタイプや速記を

教え、経済的に自立できるようにして解決しようとしている女性である。彼女は自立する女のモデルとなるべく、彼女自身独身を通そうとする。すなわち、自己実現のために意図的に結婚しない女なのである。現実にもこのような「新しい女」がいたのかどうかということは問題ではなく、フィクションのなかであるにせよ、自己実現のために意識的に結婚しない女性が登場したということに注目すべきだ。意識的に結婚しないというあり方が、フィクションを通じて提示されたということであるからだ。「自分自身でありたい」と結婚を拒否するリリーは、ロードの系譜に連なる「新しい女」である。

ディックは、「窓」の年代設定は、ウルフが「人間性が変わった」(“Character in Fiction” 421)と見ている1910年頃であることを指摘している(58)。つまり「窓」は過渡期の時代に設定され、新旧が混在しているのだ。結婚をめぐるラムゼイ夫人とリリーの見解の相違が、「人間性が変わった」頃の過渡期の様相を映し出している。

(4)

イギリス家父長制の産物である「家庭の天使」としてのラムゼイ夫人が、「ギリシャ風」の美人として造形され、幼い息子ジェイムズと一緒にいる彼女が、聖母にたとえられていることが意味するのは、ラムゼイ夫人を古典や聖書を権威として「西洋」文化の美として賞揚しているということである。それに対して、家父長制への参入を拒否する「新しい女」リリーに「中国人」というメタファーをあて、人種的「他者」として形象しているのである。

だが、第二部「時はゆく」では、ラムゼイ夫人が死ぬ(110)。ラムゼイ夫妻の娘たちのうちのひとりであるブルーは、その美貌によって他の娘たちとの差異を形成している。さらに彼女は優しいとされている。このことはブルーがラムゼイ夫人から容姿だけではなく、優しさをはじめとする「家庭の天使」的な性質をも引き継いでいることを暗示している。が、ブルーは結婚後まもなく「出産にかかわる病気」(113)で死ぬ。ブルーの死は「家庭の天使」が新しい時代には通用しない美德であることを暗示する。また、ラムゼイ夫人がその数学の才能に期待していた息子アンドリューは、戦死する(114)。「窓」における家族のメンバーが、死によって欠けていくというプロットの

展開は、ラムゼイ夫人の信奉した家庭道徳が、もはや有効でなくなったことを示唆している。さらにまた、「窓」から約10年の歳月を経た第三部「灯台」で、ラムゼイ夫人が結婚させたポール・レイリとミンタは、夫婦としての関係が破綻しているということがあきらかにされる。その後、レイリ夫妻は、「危険な段階は通り越し」(148)、夫妻は、ポールと政治思想を共有する女性を挟んだ友情で結ばれているということを、リリーは「窓」の時点では描いている途中であったラムゼイ夫人の絵に向かいつつおもい、次のように結ぶ。

そうしてこれがレイリ夫妻の物語です、リリーは思った。ラムゼイ夫人に話しているような気持ちでした。だってラムゼイ夫人は、レイリ夫妻の後日談に好奇心を持っているでしょうから。その結婚が成功でなかったことを話して、ちょっと得意な気もします。(148)

この場面のリリーの述べが示しているのは、ラムゼイ夫人の抱いていたヴィクトリア朝的家庭観が、その権威を失ったことをリリーが語れる立場にいるということだ。またリリーは、ラムゼイ夫人が彼女とウィリアム・バンクスを結婚させようとしていたことを思い起こし、その企てから逃れられたことを喜び、「誰とも結婚する必要はない」と「すごく得意」(150)になるのであった。第一部「窓」において、「結婚」をめぐる顕在化していた「家庭の天使」ラムゼイ夫人と「新しい女」リリーの対立を、第三部「灯台」におけるリリーは、彼女自身が優位にいると判断しているのである。リリーはラムゼイ夫人を次のように考える。

でも、亡くなった人々、とりリーは構図のなかに、彼女を休止させ、思案させる妨害に出会って、一歩、二歩、後じさりして考えた、ああ亡くなった人々！ と彼女はつぶやいた、亡くなった人々は隣れまれ、払いのけられ、少々軽蔑もされます。全く私たちの思いのままなのですから。ラムゼイ夫人も色褪せて消えてしまいました、とりリーは思った。私たちはあの方の希望を踏みにじり、あの狭い、旧い考えを改めたりもできるのです。あの方は次第に私たちから遠ざかっていきます。(148)

リリーは「家庭の天使」ラムゼイ夫人の死と、ヴィクトリア朝的な理想はもはや過去のものとなったということを重ね合わせて、彼女自身の勝利を確認している。イギリス家父長制のイデオロギーによる「家庭」の神聖視がもはや有効でなくなったということ、すなわち「西洋」家父長制の権威が失墜したということを語る視点を手にしているのが、「中国人」リリーであるということを強調したい。リリーに与えられた人種の「他者」のメタファー＝「中国人」は、彼女が「西洋」の理想の無効性を指摘できる存在であることを示唆しているのだ。

「西洋」の理想の虚偽を見抜ける視点を手にしている人物は、リリーだけではない。老哲学者で、詩の翻訳も行なうオーガスティン・カーマイケルは、毎年ラムゼイ家の別荘を訪れる。だがそれにもかかわらず、彼が実はラムゼイ夫人を信用していないと、夫人は感じている(37)。彼のラムゼイ夫人への不信感が、果たしてラムゼイ夫人が考えているように、彼自身の結婚生活の不幸に由来するのだろうか、ここでは議論しない。が、問題としたいのは、ラムゼイ夫人に不信感を抱くカーマイケルが、アヘンを常用しているとされていることの意味である⁽¹⁰⁾。

すでに述べたように、『灯台へ』において登場人物たちの過去はあまりあきらかにされていないが、カーマイケルに関しては、「オックスフォードで誰か女の子との事件があり、早く結婚なさいました、貧困、インド行き」(13)とラムゼイ夫人が語っている。『灯台へ』におけるアヘンの問題については、また稿を改めて論じたいが、ここでは、カーマイケルがアヘンをおぼえたのが、彼のインド行きと関係あるのかどうかについてテキストはあきらかにしていないものの、当時のイギリス人にとっては、アヘンは「東洋的」なものであったということを強調しておきたい。「窓」の時点ですでに老人であるカーマイケルがインドに行った頃とは、『灯台へ』では年代に関する詳細な具体的記述がないものの、おおよそ19世紀半ばから末であるという推測はできる。

その頃のイギリスにおけるアヘンの扱われようを見てみたい。1870年の下院討議で、グラッドストーン首相はアヘンを「嗜好品」として扱うことの是非を、中国におけるアヘンとイギリスにおけるアルコールを同等のものと捉えたうえで論じようとしている。アヘンもアルコールも過度の摂取は有害だ

が、適度に摂取するという節度ある消費の仕方もあるというのだ⁽¹¹⁾。1875年の下院討議においても、元ベンガル副知事のジョージ・キャンベル議員は、アルコールとアヘンの害は同等で、アルコールは西洋の悪でアヘンは東洋の悪であると述べ、アーリアン人種がアルコールを好むのに対し、トゥラン語族はアヘンを好むと言っている⁽¹²⁾。また、1881年の『タイムズ』紙で、元インド財務大臣であったトレヴェリアンは、アヘンが、鈍感で不活発なトゥラン語族に適した嗜好品であると言っている⁽¹³⁾。このように、19世紀半ばから末頃において、イギリスではアヘンが「東洋的」なものであるとして認識されていたということを指摘して、カーマイケルのアヘン常用が「非西洋」を示す指標であることを確認しておく。すなわち、ラムゼイ夫人に不信感を抱いているカーマイケルには、リリーの場合のように直接的に「非西洋」を示すメタファーが付されているわけではない。が、彼のアヘン常用は、彼が「非西洋」的な特性を持っていることを意味し、つまり、リリーと同じくメタファーとして「非西洋」に属するのだ⁽¹⁴⁾。すなわち、「西洋」的なものの象徴としてのラムゼイ夫人に、不信や疑念を表明する機能を担って「非西洋」が、メタファーとしてはあるが、テキストに存在しているのである。このような機能を持つ「非西洋」が書き込まれているという点において、テキストは「西洋」家父長制、そしてイデオロギー的に同根である「西洋」帝国主義、さらには「西洋」至上主義に疑問を投げかけているという見方が、一応できるであろう。

(5)

メタファーとしての「中国人」として形象されているリリーの存在と、彼女のイギリス家父長制への参入の拒否は、テキストが示す「西洋」家父長制への、そして一元的「西洋」至上主義とそれを根拠とする「西洋」帝国主義への疑念を顕在化させる装置として機能していた。この意味で、ウルフによるテキストは、「西洋」家父長制と「西洋」至上主義、「西洋」帝国主義へのアンチテーゼとして「非西洋」を見出しているといえる。

ここで想起したいのは、「西洋」的ジェンダー・イデオロギーと無関係な世界として、ウルフが「非西洋」を構築した例を、『オーランドー』に見出

すことができるということだ。男性から女性への変身をへて、エリザベス朝から20世紀までを生き続けた36歳の女性詩人オーランドーの「伝記」というのが、このファンタジーのあらまじだ。王政復古の時代に、男性貴族のオーランドーは、ルーマニア皇女につきまとわれたため、特命大使としてコンスタンチノーブルへと赴く。オーランドーは当地での活躍を認められたが、暴動に巻き込まれ、昏睡状態に陥り、7日目に目覚めたときには、女性になっていた。コンスタンチノーブルを後にしたオーランドーは、「性差のない服」である「トルコ服」を身につけ、ジプシーたちの仲間になる。『オーランドー』においては、「非西洋」ではジェンダーの差がないとされているのである。ふたたびオーランドーがジェンダーを意識するのは、女性の服を身につけてロンドンに向かう船に乗り込むときである。

こうしたウルフの「非西洋」の捉え方の是非をここで議論するのが目的ではなく、問題としたいのは、ウルフが「非西洋」を「西洋」ほどにはジェンダーを意識しない世界として構築し、それを性差のないトルコ服によって表したということだ。換言すれば、ジェンダー・カテゴリーの明確な「西洋」と較べれば、ジェンダーを意識しない世界として、「非西洋」をユートピアとして構築したということなのである。サイードが見出したような、「東洋」を「西洋」に従属すべき存在として捉えることによって植民地化を正当化しようとする言説とは逆のベクトルが、ウルフによる「非西洋」の構築に働きかけている。ウルフのこのテキストは、「非西洋」をユートピアとして造りあげているのだ。

ならば、ウルフのテキストは、「西洋」の対極にある世界としての「非西洋」の理想化によって、「西洋」の絶対的優位に揺さぶりをかけているのだと解釈することが可能なのだろうか。すなわち、『自分だけの部屋』で、帝国主義のものと植民地主義における「西洋」＝「文明」／「非西洋」＝「野蛮」という二分化と、前者による後者の支配を認める序列化の言説と、家父長制社会における男性／女性のヒエラルキーの共犯関係を見抜いたウルフが、そして『三ギニー』では、優生学を利用しそれを後盾としたファシズムに抵抗を示したウルフが、「西洋」／「非西洋」という二分化による「西洋」優位のイデオロギー、人種間のヒエラルキーに対しても抵抗を示したと考えられるのであろうか。

V・ウルフ『灯台へ』におけるリリーの「中国人のような眼」について

ふたたびサイドを見てみると、サイドは東洋人がネガティブな属性と結びつけられて、支配と所有の欲望の対象とされたことを述べている。

東洋人は、後進的、退行的、非文明的、停滞的などさまざまな呼称で呼ばれる他の諸民族とともに、生物学的決定論と倫理政治的教訓から成る枠組みのなかで眺められた。こうして東洋人は嘆かわしい異邦人という表現がもっともふさわしいアイデンティティを共有する西洋社会のなかの諸要素（犯罪者、狂人、女、貧乏人）と結びつけられた。東洋人が東洋人として見られ、あるいは目を向けられることは稀で、彼らは市民としてでも、人間としてでさえなく、解決されるべき、限定されるべき、あるいは——植民地主義的諸勢力が公然と彼らの領土を欲する場合には——接収されるべき問題として、看破され、分析された。(207)

「余った女」という社会的「他者」としてのリリーのアイデンティティは、「中国人」という人種的なメタファーで示されていたが、その「他者」性は「西洋」家父長制を揺るがす契機としても機能していた。すなわち、サイド的の意味での支配への欲望の対象としてのオリентではなく、ウルフは「非西洋」にユートピアを見、「非西洋」に「西洋」の弊害を打開する契機を見出し、「非西洋」に高い価値を置いているのである。

確かにこのような「非西洋」観は、サイドによるオリエンタリズムの主要な問題点、すなわち弱いオリентは、強い「西洋」に保護そして支配されることが必須であるという方向でのねつ造ではない。しかしながら、ウルフが「非西洋」を、ユートピアとしてではあるが、ねつ造しているという点で、すなわち「非西洋」という「他者」を自己＝「西洋」の側から勝手に構築したという点で、やはりオリエンタリズムを反復しているのである。

それならば、「他者」をねつ造するという動きを、ウルフ自身はどのように見ていたのか。ウルフは、実際の歴史のなかの女性と男性の書いた文学作品に登場する女性とを比較して次のようにいっている。

こうして、非常に奇妙な複合体としての女性が出現したわけです。想像の世界ではこの上もなく重要な存在であるのに、現実の世界では全く

取るに足らない存在なのです。詩集には巻頭から巻尾まであらわれているのに、歴史にはほとんど姿を見せないのです。(A Room of One's Own 40)

ここでウルフが問題視しているのは、家父長制のシステムが女性の神聖視を押し進めてきた一方で、現実には、多くの女性は弱い立場に置かれてきたという事実である。すなわち男性作家が、女性という「他者」を彼らにとって都合良いようにねつ造したことを問題にしているのである。男性による女性のねつ造に関するウルフの見解をもう少し見てみよう。

多分、教授が女性の劣等性について少し声高すぎるほどに強調するとき、彼は女性の劣等性ではなく、自分の優越性に関心を持っているのでしょ。自分の優越性こそ、彼が熱をこめて、力説しすぎるほどに守っているものなのです。なぜなら、それは彼にとってこの上もなく貴重な宝石なのですから。人生は男女両性にとって——ここで私は、肩で押し分けながら舗道を進んでいくその人たちに目をやりました——難儀で困難なもの、絶えざる闘争なのです。それはとてつもない勇気と自信を必要とするものなのです。それは、おそらく何よりも私たち人間が幻想を抱く生物だからでしょうが、それ自体自信を必要とするのです。わたしたちは、自信がなければ、揺り籠のなかの赤ちゃんにも等しいのです。ところで、なおいっそう非常に貴重な、この計り知れぬほどの重要なものを、どうしたら最も手早く生み出せるでしょうか？他人は自分より劣ると考えることによってなのです。(A Room of One's Own 31)

また、ウルフは家父長制と帝国主義の結びつきを次のような言葉で語っている。

だからこそ、多くの人々——実際、人類の半分——が生来自分より劣っていると感じるのが、征服し、支配しなければならぬ家長にとってきわめて重要となるのです。それは実際のところ、彼の力の主な源の一つである違いありません。(A Room of One's Own 32)

男性／女性の二分化とヒエラルキーに関するウルフの見解を、次のようなサイドのオリエンタリズムと並べてみると、両者が相似形を成していることに気づくであろう。

したがってすべてのヨーロッパ人は、彼がオリентについて言うことに関して、必然的に人種差別主義者であり、帝国主義者であり、ほぼ全面的に自民族中心主義者であったといってさしつかえない。人間社会というものは、少なくとも先進的な諸文化は、「異」文化を扱うための手段として、ほとんど例外なく、帝国主義・人種差別主義・自民族中心主義だけを個々人に提供してきたという事実をついでに思い起こすならば、これらのレッテルに対して我々が感じる直接的な良心の呵責もいくらかはやわらぐであろう。こうしてオリエンタリズムは、ヨーロッパとアジアという世界の二つの部分の差異の感覚をますます硬直化させるような方向に文化一般の圧力を増大させてきたし、またそうした文化的圧力によって、オリエンタリズムはますます強められてもきた。私が主張しているのは、オリエンタリズムとは、オリентが西洋より弱かったためにオリентのうえに押し付けられた、本質的に政治的な教義なのであり、それはオリентの持つ異質性をその弱さにつけ込んで無視しようとするものであったということだ。(204)

つまり、フェミニストとしてのウルフの見解は、オリエンタリズムの問題点を説くサイドとパラレルをなしているのだ。フェミニストとしてのウルフが、男性による「女性」のねつ造に抵抗を表明し、その一方で、「西洋」人作家としてのウルフが「非西洋」をねつ造していることを、以上で示してきた。すなわち、ウルフは彼女の批判の対象であったはずの硬直的な二項対立の構図を、自ら反復しているのだ。ここに見出すことができるのは、作家個人の意図を越えたところでその思考の方向性を支配する文化的基層としての帝国主義時代の「西洋」至上主義である。

さらに、結婚によってラムゼイ夫人的な妻・母の役割に回収されることを拒むリリーが、その理由として挙げたのが、「父」「家庭」そして「絵」であったということの意味をここで考えたい。「絵」とは、「新しい女」として、結

婚よりも画業に自己実現を賭けるという生き方を指し示す。それに対して、「父」「家庭」とは、何だろう。妻あるいは母となること、すなわち家父長制への参入と負担を拒否するために、リリーは「娘」としての役割を述べているのだ。結婚しない女性が不幸であると考えるラムゼイ夫人に対し、リリーは、妻や母とならなくても、娘というあり方に充足を見いだしていると反駁するのである。母のいないリリーが、「父」と「家庭」を結婚しない理由として挙げているということで、彼女が、母の代理の娘であるということを想起したい。第三部「灯台」におけるラムゼイ夫妻の娘キャムが、父と兄の間をとりもつ母の代理をつとめなければならない娘であるのと同様に、第一部「窓」におけるリリーは、家父長制の家庭における不在の母の代理としての娘であるのだ。「父のために家事をみている」(20)というリリーは、家父長制の女となることを拒否しつつ、すでに母の代役をつとめる娘として、家父長制のシステムに組み込まれているのである。家父長制への参入を拒否するためにリリーが挙げた理由の一部は、家父長制の制度に由来しているということを指摘することができる。

「西洋」を象徴するラムゼイ夫人は、「非西洋」リリーを「西洋」に組み込もうとして失敗におわったかのようにであった。換言すれば、「非西洋」リリーの「西洋」への同化の拒否が、成功したかのように見えていた。「灯台」におけるリリーのラムゼイ夫人に対する勝利を確認する述懐が、それを示していた。だが実は、「非西洋」リリーは、すでに「西洋」家父長制に組み込まれていたのだった。すると、「西洋」／「非西洋」のヒエラルキーの転覆をねらっているかのように見えたテキストが、その実、「西洋」の上位性をさらに繰り返していることが見えてくるのである。さらには、すでに「西洋」家父長制に組み込まれていた「非西洋」リリーのあり方と、「家庭の天使」ではないにせよ、父と兄の間の女として母の役割を引き継いでいるキャムの姿が、「西洋」的なものの存続と拡大と、「西洋」による「非西洋」の同化の欲望の暗喩として機能しているということがわかるのである。

《注》

- (1) 「フィギュレイション」とは、比喩、比喩的表現、形体付与の総体を指す表現として用いている。
- (2) 西洋の中国認識については、坂元ひろ子「欧米の中国認識」から多くの示唆を受けた。
- (3) *The Religions of China: Confucianism and Tàoism Described and Compared with Christianity.*
- (4) *The Chinese Classics with a Translation, Critical and Exegetical Notes Prolegomena, and Copious Indexes.* Vol.1.
- (5) 1925年5月14日のウルフの日記に次のような記述がある。「私はいま、全くジャーナリズムをやめて、『灯台へ』に向かいたい願いでじりじりしている。これはかなり短いものになるだろう。父の性格をそこで完全に書く。そして母の性格も。それからセント・アイヴズ。そして幼い頃。」(*The Diary of Virginia Woolf*, Vol.3 18)『灯台へ』の舞台となっているのはスコットランドの西の海に浮かぶヘブリディーズ諸島だが、そのモデルとなっているのは、ウルフが幼年期・少女期の夏を一家で過ごしたイングランド南西部の海辺の町、セント・アイヴズであることは周知のとおりである。
- (6) 「メタファー」としての「人種」を論じているスーザン・マイヤーは、「メタファー」という用語の用法について、広い意味では、ふたつの語の結びつきであるとしているが、より狭い意味での「メタファー」とは、単なる比喩であるというよりもむしろ喩えるものと喩えられるものの同化を示すと述べている(2-3)。本論ではこの意味で「メタファー」という語を用いた。
- (7) こうしたウルフの経験と『灯台へ』における「家庭の天使」ラムゼイ夫人の死を結びつけ、ウルフが「家庭の天使」と闘って発言の場を得たものの、完全に「家庭の天使」を殺すことはできなかったという見方がある(Lidoff 693)。「家庭の天使」の、そしてラムゼイ夫人の不滅性という点で、この見方は妥当であると考えられる。
- (8) ヴィクトリア朝的理想としての「家庭」、それは男による女の保護・支配のイデオロギー的なパラレルとして帝国主義とも相似をなす。こうした家父長制と帝国主義の結託は次のようなラムゼイ夫人の言葉として『灯台へ』にもあらわれている。

事実、私は男性全部の保護者なのです。理由は説明できないけれど、彼らの騎士道精神と勇気のためかしら。条約を結んだり、インドを支配したり、財政を管理してくれたりするためかしら。(9)

こうしたラムゼイ夫人の言葉には、ここでは、インド支配という事実によって代表されているようなイギリスによる「非西洋」世界の植民地化を男の仕事と考え、そうした男たちを天使のように保護する女としての役割を自らに見出すラムゼイ夫人の姿を見ることができる。ここでラムゼイ夫人が「騎士道精神」と言っているのは、女性や「非西洋」といった「弱い存在」を保護するのが男

の役割であるといったステレオタイプを言っている。

- (9) ヴィクトリア朝末に、社会現象としての「新しい女」という女性のあり方が認識されるようになった。実在の、そしてフィクションに登場する「新しい女」は多様性に富み、一概にその定義をすることはできず、緩やかな定義をするしかないが、ヴィクトリア朝以来のジェンダー・カテゴリーを脅かすような女性、本論との関連でいえばラムゼイ夫人的な「家庭の天使」の対局にある女性といえる。その意味で本論ではリリーを「新しい女」として扱う。
- (10) 新村容子『アヘン貿易論争——イギリスと中国——』によれば、アヘンの人体への影響という問題に関しては、19世紀末のイギリスでは決着がついていない問題であったという。カーマイクルのアヘン常用について考えるにあたって、この著作から多くの情報を得られた。
- (11) *Hansard's Parliamentary Debates: Third Series. Vol.201, col. 515-19.*
- (12) *Hansard's Parliamentary Debates: Third Series. Vol.225, col. 600.*
- (13) C. E. Trevelyan, "The Opium Trade." *The Times*, 26 Oct. 1881.
- (14) カーマイクルにまどろみ習慣があることから、彼に「東洋的」とみられている不活発性が付与され、このことによって活発な西洋人／不活発な東洋人というステレオタイプの転倒が起きているという点を、キャシー・J・フィリップスは指摘している(98)。が、カーマイクルのまどろみ＝不活発性も、当時の人種差別的な言説のコンテクストから考えると、彼の「非西洋」性を示唆するものとして解釈することができる。

引用文献

- Abel, Elizabeth. *Virginia Woolf and the Fictions of Psychoanalysis*. Chicago: U of Chicago P. 1989.
- Eleanor McNeen., ed. *Virginia Woolf: Critical Assessments*. Vol.3. London: Helm Information, 1994.
- Dever, Carolyn. *Death and the Mother from Dickens to Freud: Victorian Fiction and the Anxiety of Origins*. Cambridge: Cambridge U P, 1998.
- Ferrer, Daniel. *Virginia Woolf and the Madness of Language*. Trans. Geoffrey Bennington and Rachel Bowlby, London: Routledge, 1990.
- Gissing, George. *The Odd Women*. London: Sidgwick and Jackson, 1915.
- Greg, W. R. "Why Are Women Redundant?" *Literary and Social Judgements*. 4th ed. Vol.2. London: Trübner, 1877. 44-90.
- Hansard's Parliamentary Debates: Third Series. Vol.201. London: Cornelius Buck, 1870.*
- Hansard's Parliamentary Debates: Third Series. Vol.225. London: Cornelius Buck, 1875.*
- Legge, James. *The Chinese Classics with a Translation, Critical and Exegetical Notes Prolegomena, and Copious Indexes*. Vol.1. Oxford: Clarendon, 1893.

V・ウルフ『灯台へ』におけるリリーの「中国人のような眼」について

- _____. *The Religions of China: Confucianism and Tâoism Described and Compared with Christianity*. London: Hodder and Stoughton, 1880.
- Lidoff, Joan. "Virginia Woolf's Feminine Setence: The Mother-Daughter World of *To the Lighthouse*." McNees, 681-98.
- Lilienfeld, Jane. "The Deceptiveness of Beauty": Mother Love and Mother Hate in *To the Lighthouse*." McNees, 610-37.
- Meyer, Susan. *Imperialism at Home: Race and Victorian Women's Fiction*. Ithaca: Cornell UP, 1996.
- Mill, John Stuart. *On Liberty*. Ed. Gertrude Himmelfarb. Harmondsworth, Middlesex: Penguin, 1987.
- 新村容子『アヘン貿易論争——イギリスと中国——』汲古書院, 2000年.
- Phillips, Kathy, J. *Virginia Woolf against Empire*. Knoxville: U of Tennessee P. 1994.
- Said, Edward W. *Orientalism*. New York: Vintage, 1979.
- 坂元ひろ子「欧米の中国認識」『脱西欧の思想』岩波書店, 1994年, 29-60.
- Trevelyan, C. E. "The Opium Trade." *The Times*, 26 Oct. 1881: 4.
- Woolf, Virginia. "Character in Fiction." *The Essays of Virginia Woolf*. Ed. Andrew McNeillie. Vol.3. 1919-1924, Harcourt Brace Jovanovich: San Diego, 1988. 420-37.
- _____. *The Diary of Virginia Woolf*. Ed. Anne Olivier Bell. Vol.3. 1925-1930, Harmondsworth, Middlesex: Penguin, 1982.
- _____. *Mrs. Dalloway*. Ed. G. Patton Wright. London: Hogarth, 1990.
- _____. *Orlando: A Biography*. Ed. Brenda Lyons. Harmondsworth, Middlesex: Penguin, 1993.
- _____. "Professions for Women." *The Crowded Dance of Modern Life: Selected Essays*. Ed. Rachel Bowlby. Harmondsworth, Middlesex: Penguin, 1993. 101-06.
- _____. *A Room of One's Own: Three Guineas*. Ed. Michèle Barrett Harmondsworth, Middlesex: Penguin, 1993.
- _____. "A Sketch of the Past." *Moments of Being: Unpublished Autobiographical Writings*. Ed. Jeanne Schulkind. London: Hogarth, 1978. 61-138.
- _____. *To the Lighthouse*. Ed. Susan Dick. Oxford: Blackwell: 1992.
- _____. "Walter Sickert." *The Captain's Death Bed and Other Essays*. London: Hogarth, 1981. 172-85.

(2001年9月26日受理)